

書 評

エリオット生化学・分子生物学（第5版）▶ D. Papachristodoulou, A. Snape, W. H. Elliott, D. C. Elliott 著，
村上 誠，原 俊太郎，中村元直 訳

エリオット生化学・分子生物学（第5版）／D. Papachristodoulou, A. Snape, W. H. Elliott, D. C. Elliott 著／村上 誠，原 俊太郎，中村元直 訳／東京化学同人 2016／B5判 608ページ／本体6,200円＋税

本書は米国でベストセラーとなった生命科学の教科書であり、2007年に第3版の日本語訳が刊行されて以来、実に10年ぶりの日本語訳となった。第3版が清水孝雄，工藤一郎（故人）の両先生の翻訳であったのに対し、この第5版は、そのお弟子さんである村上誠，原俊太郎，中村元直の3教授によって翻訳されている。翻訳と監訳の全てをこの3教授が行っていることから容易に想像できるとおり、翻訳された日本語の文体が統一されており、極めて通読しやすい教科書に仕上がっている。

本書の第一の特徴は、「生化学・分子生物学」の教科書であることである。日本国内で広く読まれている他の生化学の教科書のほとんどは「生化学」のみを取り扱っており、「分子生物学」に関する解説は極めて淡白であることが多い。本書は全部で33の章から成り立っているが、第22章から28章にかけては、ゲノムの構造，DNA複製，転写，翻訳，タンパク質分解，遺伝子発現調節，タンパク質のソーティング，遺伝子工学，といった分子生物学の歴史と知識が分かりやすく記載されている。また、第29章以降は、細胞内シグナル伝達，細胞周期，がん，免疫系，といった細胞生物学や疾患生命科学に含まれるような内容も解説されている。本文は600ページ弱と、生命科学の教科書としては薄い部類に属すると思われる本書であるが、取り扱う対象は極めて広い。生命科学を志す初学者がまず通読するにふさわしい教科書である。私自身もいくつかの生

化学教科書の翻訳に参画しており、その中には二桁以上の版を重ねた有名な教科書も存在する。こうした歴史ある教科書の場合、改定の度に新しい知見が断片的に付け加えられ、次第に読みにくい教科書となっていくことが多い。本書はまだ第5版であり、最新の知見が付け加えられているにもかかわらず、全く違和感を感じずに読み進めることができた。

第21章までの「生化学」に関する記載は極めて明快かつオーソドックスであるが、本書の特徴は、使用されている図が全て書き下ろしである点にある。お気づきの方も多いと思うが、多くの生化学の教科書ではかなりの図が使い回されている。その点、本書では本文に合わせて図が書き下ろされているため、文章と図の関連が明快である点も、推薦したい理由の一つである。文章そのものは平易かつフラットであり、比較的淡々と解説が行われている。一部の教科書で強調されている疾患に関する記載や、生物物理に関する記載に偏ることなく、「静かに」生化学と分子生物学を学ぶことができる。各章末には、選択式ではない問題が充分な量準備されており、学生の自習や、試験問題作成に苦しむ大学教官を助けてくれそうである。

インターネット世代の現役大学生・大学院生は、なかなか教科書を買わず、一冊の教科書を最初から最後まで読み通した経験も少ないのではなかろうか。そうした現代の若者が、「とりあえず生命科学の教科書を一冊だけ通読する」気になったとしたら、自信を持って本書を薦めたい。解説された内容は広く、読み通せる適度なボリュームに収まっており、そして安価である。

（横溝岳彦 順天堂大学大学院医学研究科）